

八重ねえちゃん

朽木 祥

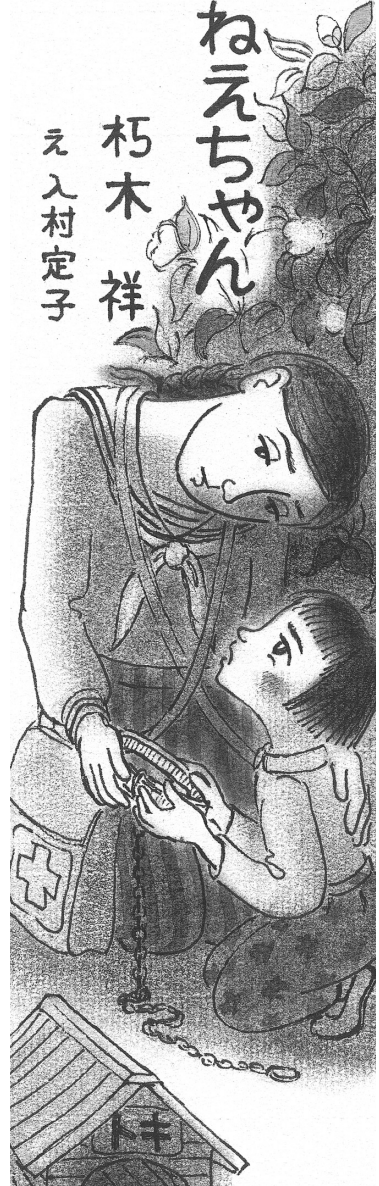
え入村定子

1

答えにくいことには聞こえないふりをする上の叔母たちのことを大人たちは「ほんまに、あの子らは賢いわ」と誉めたものだった。だけど、どんな問いかけにもたどたどと答えてくれる末の叔母が、私は一番好きだった。

八重子叔母なら、聞こえないふりはしない。都合の悪いことに気づかないふりもしない。ただし、りっぱな答えもあてにはできない。「いけんよねえ、こうようなことは、いけんよねえ」とくり返すばかりだったりする。それでも、こんなことは、いけないと思ってもいいのだとわかるだけで、子どもの私はほっとしたものだ。

父には姉妹が五人もいた。戦時の「産めよ殖やせよ」のお達しで、どこの家も子沢山ではあったが、五人姉妹は



珍しかっただろう。すでに嫁いでいた伯母二人をのぞいて、若い叔母たちはまだみんな私たち一家と暮らしていた。父母、叔母の利子、道子、八重子、そして兄と私である。

八重子叔母と八歳の私とは、八つしか歳が離れていなかった。叔母と言うよりは姉のような親しみがあって「八重ねえちゃん、八重ねえちゃん」と呼びならしていた。

幼い私から見ても、八重ねえちゃんは要領が悪くて、叱られてばかりいた。家中の者が——甥と姪にあたる兄と私さえも——いくぶん八重ねえちゃんを軽く見ていたようなところがあったのだ。だが、八重ねえちゃんはそれを苦にしている様子でもなかった。

戦争が始まってまもなく、祖父母が相次いでこの世を去った。それからは、私の母が長男の嫁として家族の面倒を